



バトンの空想

安田女子大学の川畑公平先生よりバトンを受けました。名城大学の杉山栄二と申します。川畑先生には本会や関連学会でいつもお世話になっています。同世代の薬学部教員として、積極的なご発表や関連業務への協力的な姿勢を拝見して刺激を頂いています。

先日、アメリカの政府効率化省（DOGE）が米国国立衛生研究所（NIH）のグラントを一部削減し、関連する研究者や大学院生が困難な状況に陥ったというニュースが報じられました。対象となった分野は限られており、政治により研究の道が閉ざされる例は他にもありますが、これまでにない不安を感じました。戦争や外交上の摩擦が激化する中で、当然のように享受してきた平穏な暮らしが脅かされる様子を想像できるようになってきたためかもしれません。また、現在よりもはるかに厳しい環境に置かれた先人が優れた成果を発表してきたことに、益々感嘆するようになりました。論文の執筆や講義の準備を進める中で、遠い昔の原著論文に重要な結果が明記されていることを確認したり、戦時中母国を離れて優れた研究を行った方のエピソードに触れたりすることが、自身の励ましになっています。

私は自身の研究が、魅力的な目標（仮説）とそれに続く近道を見つけて走っていくことだと感じています。自身が面白いと思える目標を設定するのは難しく、その過程を楽しんだと思っただけでは無いのですが、納得する道を介して目標に近づく喜びを得ることがモチベーションになっています。また、知らないことや意外な結果に知的好奇心が揺さぶられる喜びを味わうのも、大きなモチベーションになっています。これはそれほど高尚なものではなく、例えば私が研究を始めた頃、質量分析計に自ら調製した溶液をインフュージョンしたときの体験が挙げられます。習いたての操作に不安を感じる中、期待以上に綺麗なピークが現れたことに驚き、その強度がリアルタイムに変化する様子に見入りながら、こんなデータが取れるのだと感動していました。

経験を積んでいく中で、自分がやりがいを感じる分析が二つに大別され、それぞれが上記モチベーションと深く結びついていることが分かりました。一つは、誰も見たことのないデータが取れそうな分析です。少し変わった分析法（質量分析イメージング）を用いることが多いため、オリジナルの分析法や未解析の試料を用いて様々

な新知見が得られます。descriptive と批判されてしまうこともあります。新しい技術で得た新しい観察結果は後の研究に繋がると信じており、可能な限り論文として形にするよう心がけています。もう一つは、未検証の課題に結論を与える分析です。それまで未検証であった理由を説明するのは大変ですが、分析化学的か生物学的かを問わず、得られる結果の重要性が明確です。

自由に研究できる大学教員という職はとても魅力的な一方、モチベーションを長く維持することが容易でないということが徐々に分かるようになりました。そんなときに本稿のお話を頂いたので、研究をリレー走として捉え、自身がどのように走れば良いかについて少し考えました。

先人の意思をバトンとして直接受け取る様子を空想すると、自身との繋がりを論理的に思考するよりも少し強く感じるができます（私だけかもしれませんが…）。また、「自分は渡す価値のあるバトンを持っているのか」、「バトンを落とさず次の走者に届けられるのだろうか」という不安に対し、「既に価値ある先人のバトンを選び取れば良い」、「走り終えた場所に誰もいなくても、いずれ気付けるように置けば良い」と思えてきます。どんな形で終わろうとも、明るく野心的に取り組んでいくことが大切だと思います。4月から年長さんになった娘は、日々の新たな体験を通じて明るく前向きな姿を見せてくれます。その様子やこれまでの感動を忘れずに長く進み続けたいと思います。引き続き会員の皆様のご指導を頂きますと幸いです。

今回は豊橋技術科学大学の中神光喜先生にお願いしました。中神先生は普段関連学会で挨拶を交わす程度の関係性ですが、会話でもご発表でも常に工夫して楽しくお話しくださる方です。サービス精神旺盛な先生がどのようなことを書かれるのかを楽しみに待ちたいと思います。

〔名城大学 杉山 栄二〕